

曲 角

昭和60年4月 第1号

* "スポーツの哲学" を読んで *

岡山大学 鷹野健次

昨年末アメリカに居る奈女大の卒業生の方から一冊の本を送って戴いた。Sports and Athletics—philosophy in action, 1982, J.C.Mihalichである。彼女のご主人の友人とのことである。彼はフィラデルフィアのラサールカレッジの哲学教授であり、スポーツ哲学会の会員であり、大学競技の諮問委員会の役員でもある。学生時代は学部でジャーナリズム専攻、修士で社会哲学専攻、のちにワシントンのカンリック大学で哲学教員の資格を得、ジョージタウン大学でph. Dを得ている。若い頃シカゴクラブ、(ブルックリン)ドジャース、ニューヨーク・ヤンキーでプロ野球の選手をした経験がある。

スポーツを哲学的に思索する題名に引かれて、お正月から一心に読んだが、はじめの興奮ほどではなく読み終ってもあまりズシとくるものが無いのが残念だが、二三の印象を述べてみたい。

「卓越」という欲望は人間の本性に根ざすものであり、これを肯定することはスポーツのみならず人生のすべての面で大切である。スポーツにおける勝利主義が多くの弊害を産むからといって、これに代って勝敗抜きで競争それ自体の価値を説く立場があるが、彼はこれに賛成しない。これは敗北への口実をつくるに過ぎないという。勝利至上主義が弊害

を伴うのは今の時代が倫理的、道徳的に危機にあるからである。スポーツは社会の縮図であるから、今日の社会、文化に浸透した物質本位の価値感からの脱脚を反省しない限りスポーツの肅正は図れない。これは単なる理想論に終るかも知れないが、しかし真である。

大体こういったすじのことが書かれているが、前半は理論篇であり、実存主義とアスリートなどは面白く、プロ野球のことが書いてあるくだけは迫力を感じた。後半は実際篇であり、大学競技の管理面、とくにスポーツ学生の処遇について多くのアドバイスをしており、それは理論よりも運営であると言っている。

ここでⅦ章の“勝利の理論”の一部であるが、Rainer MartensのJoy and Sadness in Children's Sportsからの引用があるが、そのところを抜き書きしてみる。

「競争の価値についてあれこれ論争するのは無意味だと思う。競争それ自体には良いも悪いもない。競争は一つの社会的過程であって、それによって人は他人と自分を比較して見ることができる。だから、競争の影響が良いか悪いかが決まるのは競争が行なわれる環境によるのである。周囲の情報次第で競争の結果は良くも悪くもなるのである。

競争の結果が良くなかったとき、その解決

策として非競争をもってするのは賢明ではない。子供は競争行動と同時に協同的行動の双方を学習する必要があるのだし、そして、競争と協同はスポーツの本質的屬性である。スポーツに学ぶのである限り一方にのみ偏するわけに行かない。正しい解決法は場面を替えることである。競争の価値を決めるものは、どのように競争が行なわれたか、どのように競争が解決されたか、どのように競争結果に対して参加したこと自体の価値を認めたかにかかるのである。競争それ自体には何も悪い

ものは含まれてはいない。——どんなに激しく競争しようと、どんなに強く勝利を希求しようと、相手に対してどんなに強く闘おうと、われわれが競争に参加することと、競争の結果との相対的意義について、確かな展望をもつ限り競争の弊害はない」。

この後で Mihalich は敗北の哲学に注意をうながしている。そして敗北の真の意味を解することが出来るのは勝利の体験を通してであるという。それ故、振子は再び勝利の重要性の側に戻るといっているのである。

* 第 35 回日本体育学会鹿児島大会 *
* 体育心理学専門分科会シンポジウム回想 *

—— 司会からの反省と期待 ——

福岡女子大学 佐久本 稔

1. テーマ設定の舞台裏

ひょんなことからシンポジウムの世話役を受け賜わり、以来、分科会事務局から、遥々、数々の激励をいただいた。そして、福岡を中心とする会員、徳永（九大）先生をはじめ橋本（福工大）、山本（福大）、庭木（熊大）先生方の協力で、多忙の中、度々の会合をもった。

そうした過程で、これを機会に目先を変えてみてはどうか、という圧倒的な意見が支配し、紆余曲折の討議の末、テーマとして“集中力”が浮上した。

頭初は“スポーツ教育における集中力”が仮り設定されたが、案の上、関係者からすかさず、「スポーツ教育」自体が熱っぽい論議になりかねないという指摘を受けた。

そこでまた、①スポーツにおける集中力、②スポーツ選手の集中力、③集中力のトレーニング、で打診したところ、これは、スポーツ心理学会が、そっくりいただきたいテーマである。体育心理学専門分科会のテーマとしては、再考するということにあいなった。その結果、学校体育における正課と課外を考慮

して、“集中力をめぐる諸問題”に落ち着し、司会者、演者も地元の利を生かしてということとで結着をみた。

司会の立場から、大会号記載の提案理由がつけられ、演者の同意を得て各々の取り組みが始ったのは、59年3月も中頃である。

当時、われわれの共通意見としては、①、集中力の問題は、難問であるが、今日の教育全般を眺める時、集中力をどう理解し、どう育て、どう活用するかという課題は、きわめて時を得て重要と思われること、②、たとえ、^{ドウシュウショウキ}様々な議論が百出しても、集中力の^{ドウシュウショウキ}動執生疑に意義があるのではないかといった、火の国魂が燃えていた。

2. 舞台本番あれこれ

本テーマが今回限りのものか、継続性のものかの見通しもないまま、まずは、それらの手はじめとして、①、集中力の諸相・根底に関する問題に対応させて、“集中力とは”、②、集中力の発展・展開に関する問題に“体育学習と集中力”、③、②の援助・助成に関する問題に“集中力のトレーニング”を位置づけ、一つの突破口を試みた。

そして願わくば、①、現在の体育指導者が期待し、指導しようとしている集中力のイメージアップと、②、集中力をめぐる体育現場の具体的問題のリストアップの二兎を追ってみたいと提案した。

その結果は、ご承知の通り、司会のまずさとフロアーからの活発な意見という不測の事態から、その討議は収拾がつかず、もっぱら、集中力の理解の問題をめぐって意見交換がなされ、願わくばの学習過程に関連した集中力の話題は不発に終わってしまった。

集中力の一般的理解については、集中+力の合成語として考えてみた場合、力については、体力、精神力、生命力などといった力の概念と共通しており参加者の共通的認識はあったように思われる。しかし問題は“集中力”ということにあった。

集中の問題は、集中を発揮する領域の拡大やその対象の複雑さの増大が論議の焦点であったように思われる。集中は勿論、人間の集中的行動を指しているが、人間行動の集中内容のとらえ方は、きわめて、複雑多岐深遠である。「もしこれあれば、かれあり、もしこれ生ずれば、かれ生ず」といったもので、固定的にはとらえられない。また集中といった平板的な用語で包括しきれない何物かが潜んでおり、息づいており、籠っているものである。したがって、説明的内容は、全体的、立体的であることが望まれるというのは、当然の帰結であり、これに近づくのが課題である。

人間行動には、いろいろな種類があるが、戸川行男（臨床心理学論考、金子書房、1971）の人間行動の類別の試みは、われわれの研究に1つの示唆を与えてくれる。

それらは、①、目的行動（なんらかの見通し、見込み、計画、期待、予想、目的、指示命令、社会的要請などが、行動者に内在し、それが実現されるように行動が規定されている行動）、②、無目的行動（行動塵、すなわ

ち、その場で指摘されないと、その存在を自覚しないゴミのような各種の無目的行動である。しかし、無益ではなく、「あゝ」とか「えゝ」とかの意味のない音声が、正しい言葉のすべり出しの助走として役立つように、本行動への踏切りの意味あいをもつものもある）、③、定型的行動（職業的行動のように、一番効率が高く、最も合理的に組織立てられた行動である。それは、高度に合目的的であり、自覚されているが、時には、反復と習熟の結果、機械化が現われ、目的性とその自覚が失われることもある）、④、その他の定型的行動と無目的行動（職業的行動と全く同一種のもので、芸能、スポーツにおけると同じく、計画的に組織化された諸行動を指し、習慣的、生理的、群衆心理的行動などを包括する）の4つに類別される。

集中は時を短縮し、自己突破や自己と世界の再構成、再編成を可能にする。その意味では、集中は、人間の生き方に関わる実践智である。戸川の間行動の種別を通して、体育やスポーツ行動・事象に対応させてみる試みは、二つの研究の今後の発展の一つの鍵を握っているのかもしれない。

ところで集中の一般定義の理解に関しては、私個人としては H.C. Warren (心理学辞典 1936) が述べているように、「経験」ということを基盤に、「集中力とは、経験の、ある一定の部分に対する注意の中心化、経験の、ある一定の要素やアイデアについての増強された専心性や鮮明性のことである」というあたりで、共通理解が得られるのではないかと、おぼろげながら考えている。

3. 再び舞台裏・個人から

蚕は、自分の吐き出した糸によって自分を縛り上げ、最後には、繭の中で動きがとれなくなってしまう。それに対して、蜘蛛は、自分の吐き出した糸を張りめぐらし、その上を自由自在にかけめぐっている。

ある生きものの習性とはいえ、シンポジウムの司会を省って思うことは、蚕は今回の司会者に似ている。蚕と蜘蛛の行動が二重写し

となって、結局は、蚕であったように思う。次回の関係者が、蜘蛛のように、本テーマに挑戦してくださることを願ってやまない。

—— “集中力とは何か” の発表を終えて ——

福岡大学 山本勝昭

集中力の問題は、先のシンポジウムで活発な意見の交流がなされ、ぼやけていた幾つかの諸問題が、いくらか明らかにされた。つまり集中力を考える場合の問題点は、①注意の集中 (attention control) と情緒の統制 (emotion control) の問題、②集中力の一般性と特殊性の問題、③スキルの習得に必要な集中力と習得したスキルの発揮に必要とされる集中力の問題、の3点に集約可能である。

これらは、庭木・徳永両先生の演題ともからんで、とくに集中力を考える場合に明らかにしていないと、体育・スポーツ場面に適用できる集中力の測定やトレーニング、評価などへの発展はないものと考えられる。また、知覚・運動学習場面で必要とされる集中力を分けるべきか、同じものと考えるかなど、特殊性と一般性の問題とも関係してくることがらである。これらの点について、共通点やまとめが次のシンポジウムで必要とされよう。

ここで、個人的見解であるが、先ず第一に集中力の一般性 (共通性) と特殊性について述べておきたい。知・情・意の統制と統合を司る大脳の興奮 (活性) レベルや機能する局在は、原稿を書く状況、数学の問題を解決している状況、作曲をしている状況、テニスのストロークの状況などへの集中に対して同一と考えてよいものかどうか。また、同一状況においてさえも、困難な問題解決の場合と追いこまれた作曲家の状況などでは、努力や集中の度合は、否が応にも高められ、機能してくるものと考えられる。一般的に、どの課題にも共通する最適活性レベルを集中の一般性と呼び、課題に特有に要求され、しかも、問

題そのものの学習や表現から形成される局的・機能的活性を集中の特殊性と考え、両性は連続するものと見做してはどうだろうか。数学の問題を解決するのに集中力のある人は、テニスの場面である程度有効に作用すると考えられるが、その集中力を十分にテニス場面で発揮できるとは限らないからである。

次に、スキルの獲得に必要とされる集中力は、学習場面で発揮される状況と似ていればいるほど、技能の発揮場面で有効となるが、競技や試合場面では、不安、過緊張、観衆などのプレッシャーが増大し、情動のコントロールが必要となる。その意味で、イメージトレーニング、バイオフィードバック、リラクゼーションの技法が、不安の軽減や最適機づけに有効となると考えられる。しかしこれらは、本来身につけた能力を発揮させやすいように方向づける集中力のトレーニングである。心身のエネルギーを動員して、あることを成し遂げようと課題に対して集中し続けている状態が、結果として目標を達成し力を発揮できたと評価されるとき、集中力があるといえるのではなからうか。集中力の構造やモデル、集中力とパーソナリティ、集中力と動機づけ、集中力と自我関与、集中力と記憶、集中力の測定・訓練・評価など、今後の討論に期待したい。

第36回岐阜大会体心シンポジウム案内

司会：近藤充夫 (東学大)。仮題：集中力をめぐる諸問題(2)；概念規定と実用への展望
演者：調枝孝治 (広島大)；学習理論
船越正康 (大教大)；パーソナリティ } の視点から
石井源信 (東工大)；現場研究

熊本大学 庭木守彦

'84年7月、集中力をめぐる諸問題のうち、“体育学習と集中力”について、教育学部所属の立場から発表するようにとの連絡を受け、何気なく引き受けたものの、いま振り返って考えてみると反省材料ばかりが浮きだしてきて、恐縮している次第です。

与えられたテーマは、あまりにも広範囲な内容を包含しているの、教育現場との接点の立場から、集中力そのものよりも、自己学習能力をどう育成するかという観点から取りくんでみました。それは、教科体育での現実的な一時間一時間において、児童・生徒をいかにして学習行動へと向かわせるかという、学習動機づけについての問題に関心があったからです。

御承知の通り、学習場面は、主として教授者・教材・学習者から成り立ち、この三要因のうちどの一つの要因に変化が起きても、全体としての学習場面に変化をもたらすという複雑さを持っています。現場の授業（フィールド・ワーク）では、様々な事情により実験室での状態を創りだすことは困難です。教えられるものとしての“文化の獲得”と、育てるものとしての“からだの発達”の側面をもつ体育授業では、認識の対象を、身体面、精神面、ルール・競技様式、技術そのものと、それを内包する文化との両面に向けるような動機づけが必要であるということになるでしょう。しかし、それらを別々に動機づけるだけでは不充分であり、相互に関連をもたせるような動機づけの必要があります。しかも、学習の主体に学力を保障する事実とその科学的な方法をもつものとして。

動機づけという概念は、もともと心理学の研究から導き出されたものであり、広義の学習を促進させるための方法として語られるこ

とが多く、動機づけそのものの研究は多くても、それを学校教育場面（特に正科体育授業）の指導方法論に応用するための研究は、まだ不充分であるといえるのではないのでしょうか。

また、動機づけは、自発性、目標性という立場から、外発、内発的動機づけに分けられ、一般的に学習活動が目標となる内発的動機づけの方が、教育的には意義があるとされていますが、それを正科体育の教育場面の指導方法論に応用するために実証的に示し得る方法論については、いまだ取り残されたままではないのでしょうか。そのため、教授者の体験的、または主観的な方法をもって現実的場面の対応をする方向をとらざるを得ないのでは…と思います。

大学時代まで、スポーツのある種目を経験した現場教師でさえ、その体験や勉強のなかで身につけた指導観を、クラブ活動では発揮できても、同じ指導観で教科体育に臨んだ場合、学習者の意欲、動機づけなどを促進することの困難さをうったえます。まして大学までスポーツ活動経験の少ない先生方は、小学校課程の習得単位だけではとうてい不充分であり、勉強すればする程判らなくなるという現状ではないのでしょうか。

このように考えると学習主体への学力の保障は、集中力そのものでは解決されえない、即ち、心理学的技術の域をはるかに越えた人間形成そのものの課題といえるようです。

少し話が大きくなりました。現実的な体育の学習場面では、体育学習を好み、楽しむ態度を助長すべきなのに、嫌なもの、苦しいものという児童・生徒は決して少なくはありません。目標や内容について抽象的なものを具体的に実行する授業場面では、教授者の体験的、一方的な指導がなされ、学習者には認知

面的や感情面で不満が生じ、特に運動遂行が不得手な学習者にとっては、逃避的態度形成の場ともいえるようです。

クラブ活動（部活動）のような“目的をもった活動”の場面の如く、児童・生徒が喜々として運動するように、教科体育時でも単元計画の発展性、系統性などを、科学的に研究し、そこから導き出されたものを、一時間一時間の授業の目標、内容、評価までもち込んだ教授-学習プログラムの必要性を痛感します。

以上、今回のシンポジウムでは、坂手氏が提案されたこと（運動学習研究の諸問題4）：その方法論的課題；実践のための提案、第33回シンポジウム、p25）の実現を目指し、フィ

ールド・ワークとして細々と実践して来たことを発表させていただきましたが、心理学のシンポジウムというより、教科教育的な内容に落ち入り、作業仮説や課題の条件・分析の不充分さを痛感しています。

また、今回のシンポジウムに関しては、吉本氏（特集・日本体育学会第35回大会報告号傍聴記：体育心理学専門分科会シンポジウム“集中力をめぐる諸問題”、体育の科学、1984、Vol.34、p886-888）の討論内容、および雑感で述べられている内容と大同小異です。

おわりに、集中力について、特に教科体育時の動機づけなどについて、資料及び文献名など、御教示下されれば幸いです。

—— 集中力のトレーニングについて ——

九州大学 徳永幹雄

オリンピックなどのようなスポーツの競技水準が高度になればなるほど、選手の集中力が重要視され、勝敗の決め手は集中力とさえ指摘される。われわれが集中力をシンポジウムのテーマに選ぶまでには紆余曲折があった。しかし、このテーマを選んだ以上、集中力のトレーニングはいかにあるべきか、ということが当然問題となった。その役目が私にまわってきたのであった。

従来、わが国のスポーツにおける集中力のトレーニングはハードな技術の練習や体力のトレーニング、そして条件の異った数多くの試合を消化することによって、どのような環境の中でも集中してプレイできる能力を養成しようとしてきた。これに対して私の発想は体力トレーニングのウエイト・トレーニングのように、スポーツの場を離れたところで集中力のトレーニングを行い、それをスポーツの場に転移させる方法が開発できないものだろうかということであった。

この種の研究については欧米ではすでに多

くの報告がなされている。それらの文献を幾つか読みあさり、それにもとづいて試案を作成し、1つの実験を紹介して問題提起とさせて貰うことにした。

その概要は次のとおりであった。私は集中力のトレーニングを次の5段階の流れに考えてみた。

1. 集中力の診断
2. リラクゼーションのトレーニング
3. 集中力のトレーニング
4. イメージ・トレーニング
5. パフォーマンスとの関係で集中力の再診断

第1段階の集中力の診断については、集中力の定義も明確でない現状だから、その診断法が存在するはずもない。現在、米国のNid-effer, R.MのTest of Attention and Interpersonal scale のように先駆的研究も現われている。そこで集中力を「リラックスした状態で、注意を一点に集中してパフォーマンスを遂行し、それを持続する能力」といかに

も実践的な定義をしてみた。今、思えば藤田氏から「一点とは何か」と質問があったようにやや不明確であった。実験室などではある1つの意識だけに集中する意味であり、試合場面などではその状況を含めた広い意味とすべきであろう。

とはいえ、スポーツ界では集中力という言葉は日常語である。しかも、多くの監督やコーチは選手の集中力を体験的に評価できることから、何らかの客観的な診断方法の開発が試みられるべきであろう。

第2段階では集中力を養うためには、まず外界の刺激に対して心身をコントロールするためにアクティベーションやリラクゼーションの能力を身につけなければならない。とくに緊張しすぎると集中力は低下するので、リラクゼーションは必須となる。その方法として腹式呼吸、漸進的リラクゼーション、自律訓練法、バイオフィードバック法が適していると思う。これらを組み合わせて実験してみた。つまり、1) 椅子に腰ける、2) 目をつむる、3) 深呼吸をする、4) 全身の力を抜く、5) 「両手が暖かい」を繰り返す、6) 皮膚温バイオフィードバック・トレーニングを行う、という順序であった。バイオフィードバックの機器は、皮膚温が上がればヘッドフォンを通して音が低くなり、皮膚温が高くなると音が高くなるように工夫されている。トレーニングの結果が聴覚的、視覚的、数字的にも即座にフィードバックできる利点を持っている。つまり、皮膚温を高めることができればリラクゼーション能力が身についたという仮定の話である。実験方法にはまだ課題が残されてはいるが、何かの方向をつかめそうな気がしている。

第3段階では、リラックスした状態で意識をある対象物(視覚、聴覚、筋運動感覚、触覚、感情的なもの)に集中させるトレーニングをする。「ボールを見る」のはポピュラー

である。

第4段階ではイメージを用いて、「リラックス状態で集中してプレイしている自分の姿」を頭の中で反復練習する。いわゆるイメージ・トレーニングである。

そして、第5段階では練習試合や公式試合におけるパフォーマンスとの関係で集中力がどうであったかを総合的に診断する。そして、それらの結果をフィードバックさせる。これらをまとめると図1ようになる。これは集中力に限らず、スポーツ選手の心理的競技能力のトレーニング方法と考えてよいのではないだろうか。

以上が心理的技法を用いた集中力のトレーニングの試論であった。

さて、学会が終って編集部からの問いを考えてみると、次のようなことを感じた。

- ①体育・スポーツの分野、いや人間としても集中力は重要な能力であり、現在はつかみどころのない分野ではあるが、さらに科学のメスを加える価値があるだろう。
- ②集中力の定義、診断法、測定法を開発する方向での研究も進められるべきであろう。

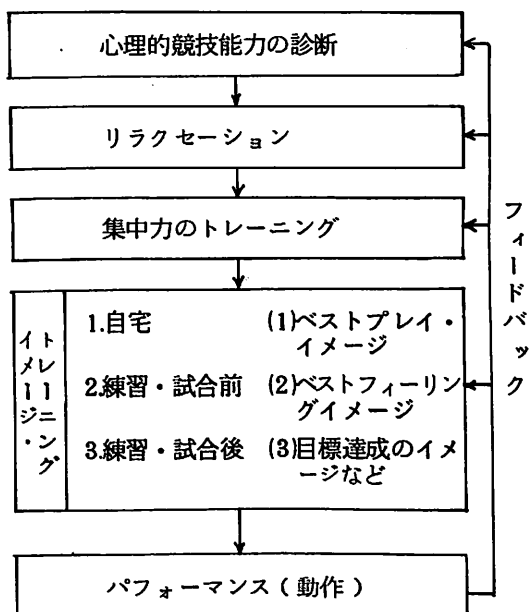


図1 スポーツにおける心理的競技能力のトレーニング法

④やはり、心理的技法を用いた方法論の開発が重要であるが、ハードな練習における集中力の問題も検討してみる必要がある。

④集中力に限らず、スポーツ選手の心理的競技能力（精神力）のトレーニング法の開発も

必要であろう。Tuttko, T. & Tosi, U. の Sport Psyking, Unestahl, L. E. の Inner Mental Training, Garfield, C. A. & Bennett, H. Z. の Peak Performance Training など欧米では次々に新しい方法論が提示されている。

* 中・四国地区研究会の呼びかけ *

体育心理学専門分科会に所属する、中・四国地区の会員は現在、16名である。これらの会員の分布は、広島5、徳島3、愛媛・山口・島根2、岡山・香川1、鳥取・高知0となっていて、支部的な研究活動はまったく行われていない。しかし個人的な研究活動は積極的に行なわれている。そのようなわけで、「曲り角」のシリーズものとなっている。各地区の研究活動と課題についてという点からは、何も書けないのが現状である。

編集委員長からの依頼を、どのような形で返答すべきか迷いつつ、最も無精な方法に訴えて重い筆を走らすことにした。つまり、近い将来中・四国地区に体育心理学（スポーツ心理学も含む）に関連した研究会を開く用意のあることを、この紙面を借りて呼びかけるというものである（他地区の会員の皆様は、この呼びかけを無視されてつぎの興味ある項に目を走らせていただきたい）。

研究会を新しく開きたいという呼びかけはどういうわけか、会員の比較的多い地区の中年世代である。その中年世代といえば、なぜか書物や論文を正確しかも詳細に読まなくなる世代である。いや読めなくなるといった方が感覚的には正しい。それに加えて、他人の話をじっくりと聞くことがおっくうになる。つまりわかったふりをするのである。そうすると当然ながら、真面目に研究している人の言動についていけなくなる。そこで、自責の念にかられて「研究会」を呼びかけるはめになる

広島大学 調枝孝治
のである。その上、こわいもの知らずに「学際的」研究会が望ましいと、つい口を滑らせてしまうのである。ところが困ったことに、学際的というのは、口では簡単に言えるが、いざ実行という段階ではなかなかやっかいな接近法である。概念装置、使用言語、研究手段、知識と経験などの差異、それにデータ解釈に対する強引な自分分野での優位性保持など、その調整に払われる時間と労力を思えば、単なる異分野の寄せ集めの研究会は骨の折れることである。なまじっか、そんな苦勞をするのなら、いっそのこと同じ分野の研究者同志で、同質の中での質的向上をねらった方がはるかに効率がよいかも知れない。いやもっと効率がよいのは、それぞれの研究者個人の頭の中が学際的思考で占められれば、これほど結構なことはあるまい。なにも今さら研究会を開かなくても・・・と変な理屈が頭の中をよぎるのである。

中・四国地区の会員は他の地区と比べて少なく、各会員は平均して4～5の学会に所属して活躍しておられる人ばかりである。これ以上、研究会をふやして、果して発表者があるのだろうか。たとえ発表者があったとしても、体育学会、各地の支部学会、それに体育心理の地区学会と発表内容の均質化が進行し研究会の討論が活発に行なわれるのかどうか疑わしい。手を変え品を変えての発表は、表層なだれを引き起こし、あげくの果てには地すべりまでも引き起こしかねない。また、中・

四国地区の距離の問題がある。本州と四国には三本の橋がかけられる予定であるが、現在のところ、研究会を開けば一泊旅行となる。フルムーン旅行ならいざ知らず、発表内容の質の予告と相当の根まわしが無い限り会員の腰は上らないかも知れない。やはり、三本の橋がすべて完成するまで研究会は見合せた方が無難だろう。などと研究会開催の呼びかけとは逆の口実が並ぶのである。少々ふざけが過ぎるかも知れないが、これも優柔不断な中年世代の特徴とご勘弁願いたい。

「研究」を仕事にしている者にとって、研究会を開いてそれぞれの分野の課題に貢献したい気持は十分持ち合わせているのが普通である。何かを始めるには誰れかが働きかけなければ、何事も進まないことも衆知の事実である。これまで述べた中年世代のぐちを包み込んだ上で、あらためて中・四国地区の会員の皆様に、「もしよければ体育心理学関係の研究会を開こうではありませんか」と呼びかけたい。わが国では、最初に手を上げてつまらぬことをしゃべった者が組織から何らかの役割を引き受ける習慣がある。その意味から、

広島地区の会員は覚悟を決めざるを得ないだろう。どうかこの提案に好意あるご返事をいただければ幸いである。最後になったが、ここに広島地区の会員の研究内容を列記して、少々大袈裟な呼びかけに終止符を打ちたい。

池田二三夫（広島大学）：精神—運動発達
の知見を小・中教育のカリキュラムにどのように適用すればよいかの研究

調枝孝治（広島大学）：運動学習の適応過程を分析しながら、学習段階の相転移を自己組織系の観点からとらえようとしている。他にタイミングの研究。

坂手照憲（広島大学）：運動学習における感覚情報の処理ということで、感覚間統合（Intersensory Integration）の研究。他に人工気候室を用いての特殊環境下でのパフォーマンスの研究。

財満義輝（広島修道大学）：自閉症児に対する運動療法の研究。他に全身反応時間と測度として性格や情緒の特性の研究。

若林文字（広島県立保育専門学校）：リズムの形成過程を発達過程の中で明らかにしようとしている。他に創作ダンスの研究。

* 関西体育心理学専門分科会例会記 *

テニスのストロークにおける正確性について

テニスのストロークでは、スピードと正確性が重要なパフォーマンスの構成要素となる。

しかも、実際にはスピードが変化しても、常にねらった所に正確に打つことが要求される。そこで被験者の自分の持つ速さを3種類に分け、速い(F)、普通(M)、ゆっくり(L)で打たせ、その際に正確性がどう変化するかを考察した。

正確性の測定方法は、まず被験者をジュースコートのベースラインに立たせた。一定間

大阪府立大学 小林 輝子
隔で送られてくるボールを、純クロス方向の目標地点に向って各種類ともに、20球ずつ打たせた。

測定の記録は次のように行なった。ボールの落下位置と目標地点との距離を直線距離とした。そして被験者の打球位置と目標地点を結びこれをY軸とした。Y軸に直交する軸をX軸として座標を作成した。ここから2つの記録方法を設け、1つはXY軸からの隔たりを測るもので絶対距離とし、もう1つは両軸

ともに目標地点を中心としてプラス、マイナスをつけ相対距離とした。

被験者10名については、試合強さの相互評価をさせて2群に分け、それぞれA群（上級者群）、E群（初心者群）とした。上記の距離についてA、Eごとに平均、標準偏差さらにEとA、LとMとH間について混合デザインを仮定した2要因の分散分析を行なった。

結果はまず直線距離ではA群がE群より短く（A 2.09 m、E 2.71 m）、分散分析を行なうと試合強さの主効果が有意（ $F=13.79$ $P<0.01$ ）であった。絶対距離では、X軸すなわち被験者からみて左右へのずれについては、A、Eともに3種類の速度間に有意差はみられなかった（平均0.84~1.16mの間）。Y軸で被験者からみて前後へのずれは、X軸に比べて

相対に目標地点までの距離が長い（平均1.56~2.75mの間）。そして、試合強さの主効果が有意（ $F=9.19$ $P<0.06$ ）で、LとHとの間に有意な差が認められた（ $F=3.86$ $P<0.05$ ）。

相対距離のX軸では、絶対距離と同様に試合強さ、3種類の速度に有意差は認められなかった。Y軸では速度L、M、H間に有意差が認められ（ $F=6.25$ 、 $P<0.01$ ）、試合強さと強度に交互作用があり、5%水準でMとH、LとHの間に差のあることが認められた。

これらのことから、目標から左右へのずれではA、E間に有意差はないが、前後方向では、Eは強く打つと目標より遠方に打つことが認められ、ここに特徴があると思われる。

（昭和59年9月25日）

中・高年者の体力と健康管理 をめぐる問題とスポーツについて

近畿大学 森 脇 勤

1978年の諸新聞は、こぞって平均寿命世界一というトップ記事を出していた。事実1983年の日本人の平均寿命は、男子74.20歳、女子79.78歳で確かに世界的によいといえる。その上、粗死亡率6.0、訂正死亡率3.3であるが、現実には誰もが長生きできる社会になったわけではない。それは生活水準の向上や医学・保健政策の進歩などによる若年層の死亡率の低下に基づくものである。しかし、日本の従属人口指数は現在では48.4であり、今後老年人口が増大することは間違いない。高齢化社会の加速が予想される我国では、過去において高齢化社会への対応策が不十分であり、この問題はますます深刻化することが予想される。たとえば、厚生省の調査では寝たきり老人は48万を越え、入院患者のうち70歳以上の占める割合は26.6%、高齢者の20人に1人は入院していることになり、これでは真の長寿国とはいえない。ここに、どうしても健康生活設計の必要性が考えられる。

今日のいろいろな調査よりみると、日常生活にスポーツをとり入れてきた人の体力は、非運動者よりはるかによいことが報告されている。人間は加齢とともに老化現象をきたすことは当然であるが、この衰退をできる限りくい止め、体力を維持し、寝たきりとか恍惚な状態でなく、健全な人生を送るべく努力することが肝要である。

このためには、適正なスポーツ活動を生活設計の中に組み入れることである。10年くらい前、Manager diseaseという語が使用されたが、今日では一般大衆にまで拡大されて、Hypokinetic diseaseと呼ばれるようになった。そこで、運動不足がいろいろな病因となることが主張され、その主張が、世界的なスポーツ・フォア・オール運動によって表現されたともみることできる。

現代のスポーツは、競技的ゲーム、野外の諸活動、審美的運動、コンディションづくり（一般に体力づくり、健康づくりなど）とし

での運動を総括したHuman movement の考え方に移行し、こういった意味のスポーツ活動が強く要望されてきたわけである。一方、健康の定義はWHOのそれを理想とするものの、国民の健康状態は平均寿命が延びても必ずしも良好とはいえず、8人に1人が患っている。体力の低下現象も早く、とくに呼吸循

U-K法からみた 児童期の身心発達特徴について

大阪教育大学体育専攻卒業生 岡崎 美樹・西垣外 裕子

体育学会の発表に見られる“身心相関に関する諸問題”の研究は、内田クレペリン精神検査(U-K)法を適用して1950~70年代を中心に継続され、この方法論の採用者間では稔りある成果を上げてきたとの自負がある。しかし、そこで明らかにされた知見が、一方法論の範疇を越えて普遍化され得たかを問うならば、必ずしも肯定しきれない。その理由は、連続加算法という数値計算を行ないながら、現代統計法の思考とは基盤の異なる臨床的思考を出発点にもち、判定・解釈に熟練を要すること、したがって、研究活動自体の熟練者に対する依存度が高く、個々の研究者による独自の展開が進まなかったこと、結果として、人柄論完成者の引退とともに、方法論と知見の一般化が頓挫したことなどが考えられよう。判定技術習得上の困難さの背景にある客観性・信頼性への疑問と時間的・経済的負担の大きさは、おしなべて投影法を中心とした臨床的研究手法が共通に抱える悩みであるが、具体的個人の問題解決に貢献してきた歴史とともに、人間心理の法則性を検証する手段として再評価されてよい魅力をもつものではなからうか。

大阪教育大学附属平野小学校では、昭和48年度より、全校生徒を対象としてU-K検査を実施し、人柄と精神健康度判定に基づく生徒指導およびクラス指導を試みてきた。その間のデータは全て保管され、途中集計(昭和

環系、神経機能、関節機能の衰えが早く、このようにみえてくると、老化防止を目的とした適切な運動処方完成と楽しみのある運動の生活化が急務である。

中・高年層を対象として、運動がもつ心身両側面からの効果研究が進められねばならない。(昭和59年11月27日)

58年)においても、1~6年時まで計6回の検査を完了し、平均曲線化可能な卒業生のみで延6卒業学年、計405名を得た。本研究では、小学校教育の中で日常的に観察される問題行動や心身の発達特徴18項目(①学業優秀者、②芸術関係教科優秀者、③志望中学進学者、④運動優秀者、⑤運動遅滞者、⑥病弱児、⑦肥満児、⑧発達が早く身体の大い子、⑨発達が遅く身体の小い子、⑩よく発言する子、⑪殆ど発言しない子、⑫アイディアの豊かな子、⑬動作・行動の遅い子、⑭整理整頓の下手な子、⑮友達の多い子、⑯友達のできない子、⑰いじめっ子、⑱いじめられっ子)を取り上げ、主に卒業年次担任による評価に基づいて該当集団の平均曲線経過を考察した。この方法は、人柄論、曲線論、曲線変化論などの高度な判定技術論の基礎として、クレペリン等による研究開始期から広範囲に使用されてきた手法である。18項目は更に細分され、計97分類×6学年=582平均曲線が考察の対象とされた。

その結果、社会的に高い評価を受ける項目該当者群①③④⑧⑩⑮の精神健康度水準は明らかに高く、その逆⑤⑥⑨⑪⑬⑭⑯は低かった。前者は精神発達が早く、適応よく、意欲的で粘り強いのに対して、後者は発達水準が低いばかりでなく、気力に欠け、過緊張や小心翼翼の状態が顕著であった。

(昭和60年2月19日)

ボールゲームにおける状況判断研究 の現状と将来の展望

大阪教育大学 中 川 昭

ボールゲームにおける状況判断については、実践で適用できる水準の研究成果はまだあがっていない。しかし、近年、この問題に直接焦点を当てた研究論文が発表され始めており、また、直接焦点を当てたものではないが関連を持つと考えられる研究は既にかなり行われている。

本研究は、これらの先行研究を組織的に整理し、論評を加え、そして将来の展望を得ることを目的として行われたものである。

ボールゲームにおける状況判断に関する先行研究は大きく二つのカテゴリーに分けられる。一つは、ゲームの中でプレーヤーによって行われる状況判断そのもの、すなわち状況判断行動に関する研究であり、もう一つは、状況判断に関する個人間の優劣差、すなわち状況判断能力に関する研究である。本研究では、後者の状況判断能力に関する研究を更に四つに分け、合計5つのトピックスの下で論評を行った。

ボールゲームにおける状況判断行動に関する研究は、状況判断を行う際に関連あると仮

定できる数学的概念を取り上げ、現実に下された意思決定との関連を検討しようとした記述的な研究と、プレーする際に下すべき最適の決定を数学的に公式化しようとした規範的な研究に二分され、論評された。

ボールゲームにおける状況判断能力に関する研究は、状況判断能力とゲーム成果との関係に関する研究、状況判断能力の内容分析、すなわち状況判断能力の構成要素の特定と状況判断能力の優劣の規定要因に関する研究、状況判断能力の測定に関する研究、そして状況判断能力のトレーニングに関する研究に分けられ、論評された。

結果として、重要な問題はほとんど未解決のまま残されていることがわかった。今後、これらの問題の解決目ざして、多くの研究努力が注がれねばならない。もし、状況判断に関して多くの科学的理解が得られれば、必ずやボールゲームの実践において大きな進歩をもたらすはずである。本研究は、そのための一つの道標として役立つことが期待される。

(昭和60年3月19日)

昭和59年度 会計報告

収入の部

前年度よりの繰越金	207,712	
会費	23,500	新入6人、旧35人
分科会補助金	100,000	昭和58,59年度分
利息	6,096	
計	337,308	

支出の部

通信費	61,990	全会員通信4回他
事務費	2,420	封筒、セロテープ
印刷費	37,500	「曲り角」2回発行
計	101,910	

次年度繰越金 235,398

体育心理学会会報

「曲り角」

昭和60年4月30日発行

代表 柏原健三

編集 船越正康

中川 昭

連絡先 〒563 池田市城南3-1-1
大阪教育大学池田分校体育学教室
体育心理学専門分科会事務局
電話 0727(51)8331(内)276